

万葉集一四一八番志貴皇子歌

松 本 尚 美

はじめに

万葉集一四一八番は春雑歌の巻頭に置かれ、蕨という万葉集では珍しい題材を素に春の訪れを詠んだ歌である。

志貴皇子の懼びの御歌一首

いはばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

(巻八・一四一八)

この歌は滝のほとりに芽生えた蕨によって春の到来を感じ喜ぶ歌として解釈されてきた。本稿は、一四一八番を宴席において春を思つて詠んだものではないかという立場から考察し、万葉集は実景や写実を重んじたもので、古今和歌集以降に見られる題詠などは存在しないという定説に対して疑問を提示するものである。

なお、引用歌の本文は『新日本古典文学大系 万葉集』^①による。

一、先行研究

万葉集二四一八番は、題詞「懽」の内容、初句「石激」の訓、第三句「垂見」の実体の点において、研究者により異なる解釈が見られる。

「懽」の内容についての先行研究をみると、次の四つの解釈が挙げられる。

- ① 春という季節に対する喜び
- ② 加封・進位
- ③ 政治的立場の転換
- ④ 宴席での春の祝賀

はじめに、春という季節に対する喜びと捉える説をとりあげる。

鴻巣盛広氏は、「封戸が攝津などにあつたのではないかと略解には想像してゐる（略）余はこれを一切考へないで、唯春の来たのを喜び給うた歌として解釈したい」とし、稲岡耕二氏は「増封や位階昇進時の作とも言うが、春の景物によせ『万物の時をうる』悦び（拾穂抄）を表した歌と解するのがよい」と述べ、伊藤博氏も、「つとに『万葉拾穂抄』にはいう、『水流れ草もえて万物の時をうるを悦び給へる御歌なるべし』と。一首の風姿は、この簡潔な評言によつて、すべてが尽きている」と述べ、「懽」を春到来の喜びと捉えている。

次に、加封・進位の「權」とする説をあげる。

村山出氏の「春の到来を歡ぶ春の頌歌」であり、『封戸』の加増という具体的事実に基づく歡びとか何らかの内面的喜悅を表彰する譬喩歌^⑤という説、小川達雄氏の「封戸を増やされるに及び、持統年間に発見の醴泉に伴う『垂水』の意味にちなんで、この歌を歌った(略)個の思いともいうべき心情を、春の到来のよろこびという、一般的な心情に昇華せしめた^⑥」という、春到来の喜びと増封の喜びを重ね合わせる説がある。土屋文明氏も「權」の内容について「増封などの場合で、其の封地が摂津垂水であった^⑦」という可能性を示唆している。

続いて、政治的立場の転換説をとりあげる。

大浜巖比古氏は『石走る』の枕詞は『近江』の枕詞でもある^⑧として、志貴皇子自身の血統である近江朝を垂水に見立て、「垂水のほとりに多年忍んで根を持ちつづけるわらびの我が身―我が一族、そこに春が来た^⑨」と、家運の転機が訪れた喜びを、他者に気づかれぬよう自然詠として詠みあげたものという説を提示している。同様に政治的立場の転換を指摘する説として山崎良幸氏は「最もおそれていたその人がこの世から去って行ったのである^⑩」と述べ、志貴皇子の「權」を、持統の死によって天智系の皇子であるがゆえの政治的緊張感から開放された心情と捉えている。最後に、宴席で春を祝賀するという解釈をとりあげる。

『新潮日本古典集成 万葉集二』の「春到来の喜びを歌った宴席歌か^⑪」という説や、『新編日本古典文学全集七 万葉集②』の「酒宴などでの感興を眼前の物に寄せて歌ったものか^⑫」、井手至氏の「春の到来を喜ぶ歌として伝誦され、公の席で披露されることが多かった歌であろう^⑬」という説、中西進氏の「新春の賀宴に祝意を述べる趣で題詠された歌^⑭」という説、堀勝博氏の「単に個人心理的な『權』のではなく、(略)酒宴の場に臨んだ『權』で(略)立春を祝賀した^⑮」ものとする説、森斌氏の「晴の場」で詠まれた「新春という新しい年を慶賀する權^⑯」という説などがあ

げられる。本稿ではこの、宴という場において詠まれた作という説を支持する。

「石激」の訓は、契沖以前は全て「いはそそく」であったが、賀茂真淵によって「いはばしる」と改められて以来、「いはばしる」の訓が主流となった。

これに対し、窪田空穂氏は「石灑ぐ」の訓をとり、次のように説明している。

「灑」は「類聚古集」に依る。諸本「激」となつてをり、「いはばしる」である。何れも用例のあるもので、定め難い。一首の気分と調和の上から見て「灑」に従ふ。¹⁷

武田祐吉氏も「石灑ぐ」の訓をとっており、窪田空穂氏同様に「類聚古集」に依ると述べている。¹⁸

堀勝博氏も「いはそそく」の訓をとるが、窪田空穂氏や武田祐吉氏とは異なつた解釈を示している。堀勝博氏は一八四番の情景を「水が水を垂らし石をそそぐ、その濡れた石の上にさわらびが生えてある」と述べており、「垂見」を瀉とせず、水が解けて水が滴り落ちる様、つまり「垂水」として解釈している。それによつて初句「石激」を、水が勢いよく流れるという意の「いはばしる」の訓ではなく、水が「触れ濡らしすすぐ」という意の「いはそそく」の訓をとっているのである。

以上が初句「石激」を「いはそそく」と読む研究である。

しかし、鴻巣盛広氏、澤瀉久孝氏、井出至氏、伊藤博氏など多くの研究者は「いはばしる」の訓をとっており、また、『新潮日本古典集成 万葉集二』『新日本古典文学全集七 万葉集②』『新日本文学大系 万葉集二』『和歌文学大系二 万葉集(二)』の注釈書も、いずれも「いはばしる」の訓をとっており、現在はこちらの訓が定着しており、

本考察もそれに従う。

「垂見」には、滝という普通名詞とする説、撰津の地名とする説がある。「袖中抄」に「たるみのうへのさわらびとは、撰津と播磨のさかひに、たるみと云所あり」とあり、また「万葉代匠記」に「たるみは津の国豊島郡に有」とある。これらによって鴻臚氏、藤森朋友氏は「たるみ」という地の滝と解釈し、土屋文明氏は「其の地をさして居るのかもしれない¹⁸⁾」との見解を示している。

これに対し、金子元臣氏は「これを撰津国豊島郡の垂水神社の地称とする説は諾へない¹⁹⁾」とし、窪田空穂氏は「地名とすると下の続きが不穩当のものとなる²⁰⁾」と述べ、武田祐吉氏も「集中の垂水は、みな普通名詞であるから、ここも普通名詞とすべきである。(略)地名としては垂水ノ上ノサワラビということが意義をもつてこない²¹⁾」というように、地名としての「垂水」に否定的な意見もある。

『新潮日本古典集成 万葉集二』『新日本古典文学全集七 万葉集②』『新日本文学大系 万葉集二』『和歌文学大系 二 万葉集(二)』などの注釈書や、中西進氏、伊藤博氏は普通名詞の滝を指すとしており、こちらの見方が主流となっている。

一四一八番に現れる「垂水」には、延命の効能をもった特殊な滝とは重ならないので、あえて地名を限定する必要はないように思われる。

集中「垂水」を詠んだ歌は、一四一八番を含め三首である。

命をし幸く吉けむと石走る垂水の水をむすびて飲みつ
石走る垂水の水のはしきやし君に恋ふらく我が心から

(巻七・一一四二)

(巻十二・三〇二五)

一四二番は、摂津国にある延命の滝ともいべき聖なる滝を詠んだもので、三〇二五番は、ほとぼしる滝の水のように激しい恋心を詠んだもので、「垂水」に明確な役割が課せられている。

「垂水」の用例がわずか三首であるのに対し、急流を意味する「滝」を詠んだ歌は、句索引によると二十四首と多く見られる。その二十四首のうちには、次に挙げるような「落つる滝」という表現もあり、

山高み白木綿花に落ち激つ滝の河内は見れど飽かぬかも

(卷六・九〇九)

…み吉野の 滝もどどろに 落つる白波

(卷十三・三三三三二)

み吉野の滝もどどろに落つる白波留まりにし妹に見せまく欲しき白波

(卷十三・三三三三三)

これらは瀑布を表す「滝」として理解することができる。

また、急流を意味する「滝」は、次に挙げるような讃歌として詠まれることが多い。

…水そそく 滝の都は 見れど飽かぬかも

(卷一・三三六)

み吉野の滝の白波知らねども語りし継げば古思ほゆ

(卷三・三三三)

神からか見が欲しからむみ吉野の滝の河内は見れど飽かぬかも

(卷六・九一〇)

人皆の命も我もみ吉野の滝の常磐の常ならぬかも

(卷六・九二二)

三六番は吉野宮を「滝の都」と称して見飽きることが無いと言い、三二三番では太古の吉野の「滝」に思いを馳せ、

九一〇番は「滝の河内」に神性を与え、九二二番では「滝」を永久不変の象徴としている。「滝」は急流を指す場合、瀑布を指す場合のどちらも、神聖でありがたい状態を表して土地褒めに用いられている。瀑布の「滝」と同様に「垂水」にも、神性が認められるのではないだろうか。

続いて、題詞「懼」との関連から「垂水」の状態について更に考察を進める。一一四二番の「垂水」は、「むすびて飲みつ」とあることから、手ですくって飲むことのできるような、緩やかで小さい規模の滝であろうと推測される。これに対し、三〇二五番の「垂水」は、激しい思いと重ねあわせて詠まれているため、流れも急で大きな滝と考えられる。滝を詠んだ歌について分析するために、「落つる水」として瀑布を詠んだ歌を「垂水」歌の類歌として取り上げる。

高山ゆ出で来る水の岩に触れ碎けてそ思ふ妹に逢はぬ夜は

(卷十一・二七一六)

高山の岩もと激ち行く水の音には立てじ恋ひて死ぬとも

(卷十一・二七一八)

筑波嶺の岩もどろに落つる水世にもたゆらに我が思はなくに

(卷十四・三三九二)

二七一六番は、恋人に会えずにいる辛さを水が碎けるように心が碎けると表現し、二七一八番は、滝の音のような響く噂は死んでも立てられまいという強い意志を滝の様子に託し、三三九二番では、轟音を立てて落ちる水が止まらないように自分の気持ちも定まらないと、感情を表現する材料として、滝が用いられている。

滝の勢いのよさは、以上のような作者の強い感情と結び付けられて歌に詠まれる。一四一八番が、めだたい春の到来を詠んだものであること、題詞に「懼」とあることなどを考えると、ここでの「垂水」も勢いのある激しいものを

指すと考えられる。

二、蕨について

万葉集において蕨の詠まれた歌は、志貴皇子の一四一八番のみである。そこで、詠歌対象としての蕨について考察するため、八代集を参照する。八代集において蕨を詠んだ歌は、次の五首である。

煙たちもゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびとなづけ初めけむ

(古今・卷十、物名・四五三)

早蕨や下にもゆらん霜枯れの野原の煙春めきにけり

(拾遺・卷十七、雑秋・一一五四)

山里は野辺のさ蕨もえいづるおりにのみこそ人はとひけれ

(金葉・卷一、春・七一)

み山木のかげ野の下のしたわらびもえいづれども知る人もなし

(千載・卷一、春上・三四)

岩そ、くたるみのうへの早蕨のもえいづる春になりにけるかな

(新古今・卷一、春上・三三二)

古今和歌集をはじめとした八代集では、蕨と「もゆ」は縁語であるとされ、一首に組み合わせて詠まれていた。古今和歌集四五三番の解説に「『わらび』は『藁火』と『蕨』を掛ける」とあり、また「『燃ゆ』と『萌ゆ』とを掛ける」とあって、わらびの「び」が「火」に通ずることから、「燃ゆ」が縁語として導き出されるのである。これは、拾遺和歌集一一五四番の「早蕨」についても同じことが言える。

しかし、「わらび」が「火」に通ずることは、万葉集においてはあてはまらない。「ひ」は上代特殊仮名遣いにあたり、

『時代別国語大辞典 上代編』によると、「わらび」の「び」は甲類であり、「火」を表す「ひ」は乙類である。仮名遣いが異なるので、万葉集において「蕨」と「火」は通ずるものではなく、したがって「萌ゆ」と「燃ゆ」は掛け詞にならないといえる。

「蕨」に対して「生ふ」ではなく「もゆ」が用いられるようになったのは、万葉集一四一八番が初めてであり、後世においては古今和歌六帖七番、和漢朗詠集一五番が参考になったと考えられる。

岩そそくたるひのうへのさわらびのもえ出づる春になりけるかな

(古今六帖・一・七)

石そそく垂氷のうへのさわらびの萌えいづる春になりけるかな

(和漢朗詠・春、早春・一五)

八代集に現れる「もゆ」は、「萌ゆ」と「燃ゆ」の掛詞で、古今和歌集四五三番や拾遺和歌集一一五四番では、野焼きで煙の立つ風景の描写に用いられている。拾遺和歌集一一五四番は、蕨の芽生えを春の到来と結びつけ「春めきにけり」と詠んでいる。金葉和歌集七一、千載和歌集三四番は、春上の部立に置かれている。春の野焼きの風景に現れる蕨、「春めきにけり」と表現される蕨、春の初め景物として春上の部立に登場する蕨、ということから考えて、八代集における蕨は、早春の景物であり、春の証として考えられていたと言える。

次に、『源氏物語』と『枕草子』に登場する蕨に対する「さわらびの萌え出づる春」という表現の与えた影響について考察する。

年かはりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の水とけたるを、あり難くも、とながめたまふ。聖の坊より、

「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨など奉りたり。齋の御台にまゐれる、「所につけては、かかる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など人々の言ふを（略）

君がをる峰のわらびと見ましかば知られやせまし春のしるしも

（源氏物語・椎本）

阿闍梨のもとより、「年あらたまりては、何ごとかおはしますらん（略）」など聞こえて、蕨、つくづくし、をかしき籠に入れて、「これは童べの供養じてはべる初穂なり」とて奉れり。（略）

君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初わらびなり

（源氏物語・早蕨）

源氏物語の「椎本」「早蕨」をみると、新春の度ごとに阿闍梨が蕨を含めた若菜を、八の宮に贈っていたことが分かる。阿闍梨は八の宮亡き後も変わらず、残された姫君たちに、芹、蕨、土筆といった若菜を贈っている。

「椎本」では、雪の解けた所で手づから摘んだ芹と蕨が登場し、それらは「齋の御台」つまり、仏事の食事とされている。人々は「かかる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆる」と言い、姫君は「わらび」を「春のしるし」と歌に詠んでいる。

「早蕨」では、父八の宮、姉大君を亡くした中君を思いやつて、阿闍梨は寺で使う童たちに献上された蕨や土筆を、「収穫した作物をまず神仏・主君に捧げる」ための「初穂」として贈っている。さらに、阿闍梨は歌を詠んで、新春の度ごとに「初わらび」を摘んでいたことを述べている。

源氏物語「椎本」「早蕨」からは、新春の蕨が神聖な作物として扱われていることが見て取れる。『平安時代儀式年中行事事典』^⑧によると、芹や蕨や土筆などを献上して食する行事を「供若菜」といい、「一定の日に若菜を摘んで献

上する宮廷儀式。春先に萌え出る蔬菜類を広く若菜というが、特には年頭の祝儀に用いる新菜をさし、邪気を払う趣旨でこの羹を食する習慣があつた」と説明し、この行事に登場する「十二種若菜」として、「若菜、薊、莖、芹、蕨、薺、葵、芝、蓬、水蓼、水雲、松（菘）」を挙げてゐる。源氏物語「椎本」「早蕨」に登場する蕨は、このような神聖な儀式のために用いられており、また新春の到来の証とされている。

次に、枕草子をみると、「五月の御精進のほど」という、中宮の五月の潔斎行事中という時季が舞台となっており、「郭公の声たづねありかばや」とホトトギスの鳴き声を聞きに田舎へ出かけて、「明順の朝臣」という家の主人にもてなしを受ける際に、蕨が登場する。

懸盤などして、物食はせたるを、見入るる人なければ、家あるじ、「いとわろくひなびたり。(略)」「この下蕨は、手づから摘みつる」など言へば(略)

「取りおろして、例のはひぶしにならばせたる御前たちなれば」とて、取りおろしまかなひさわぐ

(枕草子・一〇四段)

枕草子では、女房たちは蕨を使つた料理などに見向きもせず、さらに家の主も「いとわろくひなびたり」と、田舎風で粗末であると述べてゐる。さらに、女房たちがいつも腹ばいで伺候している様をからかつて、足つきの台である懸盤から下ろして、「下蕨」を用いた食事を提供してゐる。

枕草子に登場する五月の蕨には、源氏物語のような神聖さは見られず、女房達の見向きもしない「いとわろくひなびた」ものとして扱われている。

源氏物語と枕草子とを比較してみると、新春の蕨のみが春到来の証として神聖なものとされ、それ以降の蕨にはそのような神聖さが与えられていない。

源氏物語に登場する新春の蕨、八代集における早春の証としての蕨、このような早春と蕨の結びつきは、万葉集一四一八番によるものと考えられる。卷八春雑歌の巻頭に配され「春になりけるかも」という詞によつて、一四一八番は春の始まりを宣言する歌となった。さらに蕨の芽吹きに注目し、春に芽吹いた柳の美しさを表すのに用いられる「萌ゆ」という詞によつて、蕨のそして早春の美しさを表現している。この歌を早春の景を詠んだものとして、「若そそく垂水のうへのさわらびの萌えいづる春になりけるかな」とのせた、古今和歌六帖や和漢朗詠集などから影響を受けて「源氏物語」の「わらび」も新春の証として考えられ、神聖な蕨として詠まれたのだと考えられる。

万葉集において「さわらび」を特に取り上げる研究は少ない。伊藤博氏は正倉院文書における蕨の記述に「さわらび」の語がないことから「さわらび」を歌語とし、特殊な詞であることを指摘している。

澤瀉久孝氏は、小林安治氏からの私信として、「さわらび」を蕨と解釈しては時期的にずれが生じるのでぜんまいではないかとする説を紹介しているが、澤瀉久孝氏は「さわらび」は蕨を指すと結論づけている。

井出至氏は「さわらび」の説明で「わらび。ぜんまいをいう」としており、蕨ともぜんまいとも捉えられるとしている。

『新潮日本古典集成 万葉集二』『新日本古典文学全集七 万葉集②』『新日本文学大系 万葉集二』『和歌文学大系 二 万葉集(二)』の注釈書、若浜汐子氏『万葉植物概説』、『万葉植物事典「万葉植物を読む」』は、「さわらび」を単に蕨と説明している。

森斌氏は、「蕨は春のものとして早くても中春か、むしろ一般的には晩春からの山菜である(略)新鮮なものが正

月に芽生えているとも考えられない(略)蕨を素材に春の権びを純粹に、そして写實的にうたうというのも、また考えにくい³⁹⁾と植物学的な観点から「さわらび」を説明しており、実景としての「さわらび」を疑問視している。

植物学的には時期はずれの植物である蕨が「春になりにけるかも」と、春の証として表現したのは、蕨を春菜のひとつとして捉えていたからであろう。

梅や桜などに代表される春の植物の中でも、蕨が歌に詠まれることは稀である。文学的な素材として蕨が登場することは少ないが、『日本国語大辞典 第十三卷⁴⁰⁾』を参照すると「蕨手」「蕨手刀」「蕨手文」という語が挙げられており、それぞれ次のように説明されている。

「蕨手」 曲線の先端が早蕨のように巻いている意匠

「蕨手刀」 刀剣の一つ。古墳時代末期から奈良時代にわたり盛行した。柄頭がわらびでに意匠されている

「蕨手文」 早蕨の芽の巻き上がったような曲線の文様。古墳時代の銅鐸、銅剣、太刀の金銅装具、人物埴輪の彩色、装飾古墳の壁画などに見られる

蕨は文学的な素材としては稀であったが、剣や銅鐸の装飾といった文化的な素材としては多く用いられていたのがある。銅剣、銅鐸などの祭器に蕨が意匠として用いられたのは、蕨に呪術的な側面が認められていたからであろう。このことから、一四一八番の「さわらび」も単なる植物としての蕨のではなく、祭祀的な意味合いが込められていたと考えられる。

一四一八番の「さわらび」は、「枕草子」のような季節遅れの「下蕨」ではなく、「源氏物語」と同様に新春の蕨で

ある。「さわらび」の「さ」は意味のない接頭語で単に厥を指す、とする鴻巣盛広氏や藤森朋夫氏の説もあるが、こ
 こでの「さわらび」は井出至氏の主張するように、「藪に対する晴、清浄、神聖などの意を添える」⁽³³⁾ものとして考え
 られる。若菜にも数えられる「さわらび」は、春を寿ぐ神聖な題材として春雑歌の巻頭歌である一四一八番に詠まれ
 たのだといえる。

三、「萌ゆ」と「生ふ」

第四句の「萌え出づる」という表現について考える。「萌え出づる」の用例は集中、一四一八番一首のみである。
 「萌ゆ」という詞が詠まれた歌としては、次の六首が上げられる。

詠柳

霜枯れの冬の柳は見る人の縷にすべく萌えにけるかも

(卷十・一八四六)

浅緑染め掛けたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも

(卷十・一八四七)

山のまに雪は降りつつしかすがにこの川柳は萌えにけるかも

(卷十・一八四八)

山のまの雪は消ざるをみなぎらふ川の沿ひには萌えにけるかも

(卷十・一八四九)

春は萌え夏は緑に紅のまだらに見ゆる秋の山かも

(卷十・二一七七)

春雨に萌えし柳か梅の花共に後れぬ常の物かも

(卷十七・三九〇三)

一八四六番から一八四九番までの四首は「柳」の題で春を詠んだ歌である。一八四六番は、冬の霜枯れした柳の対極として春に芽吹いた柳を「萌えにけるかも」と詠んでおり、一八四七番は、春の柳が浅緑色になつてゐる様子を「萌えにけるかも」と表現している。一八四八番では、山間に雪が降つていながらも柳が芽吹いてゐることを、一八四九番では、雪が残つてゐるのに川沿いの柳が芽吹いてゐることを、それぞれ「萌えにけるかも」と表現している。さらに、三九〇三番では「春雨に萌えし柳梅の花」と詠んでおり、柳の様子を梅の花と並ぶほど美しく春らしい景物として捉えている。このように、柳の美しさは「萌ゆ」という詞と強く結びついて、その美しさが強調されている。

一四一八番では、春になつて芽吹いた柳の鮮やかな新緑を表す「萌え出づる」という詞をもつて、「さわらび」を形容している。その「萌え出づる」という詞によつて、「さわらび」は春の柳のように鮮やかな浅緑色であると表現された。

次に「萌ゆ」の類義語で、植物の成長を表すのに多く用いられる「生ふ」をとりあげ、「萌ゆ」が単に植物の生育状況を述べる詞ではなく、喜ばしい感情と色彩をも表す特殊な詞であることについて考察する。

「生ふ」の用例としては次のものが挙げられる。

…大殿は ことと聞けども 春草の 繁く生ひたる… (巻一・二九)

磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに (巻二・一六六)

み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも (巻二・一八一)

託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり (巻三・三九五)

…千鳥鳴く その佐保川に 石に生ふる 菅の根取りて しのふ草 蔽へてましを… (巻六・九四八)

かくしつづ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋は散り行く

(卷六・九九五)

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

(卷六・一〇四八)

…百枝さし 生ふる橘 玉に貫く 五月を近み あえぬがに 花咲きにけり…

(卷八・一五〇七)

わがやどは覺しだ草生ひたれど恋忘れ草見るにいまだ生ひず

(卷十一・二四七五)

磯の上に生ふる小松の名を惜しみ人には知れず恋ひわたるかも

(卷十二・二八六一)

山川の水陰に生ふる山菅の止まらずも妹は思ほゆるかも

(卷十二・二八六二)

二九番の「春草の繁く生ひたる」、一八一番の「生ひざりし草生ひにける」、三九五番の「生ふる紫草」、九四八番の「石に生ふる菅の根」、一〇四八番の「芝草長く生ひにけり」、二四七五番の「しだ草生ひたれど」「恋忘れ草…いまだ生ひず」、二八六二番の「水陰に生ふる山菅」、これらのように、草の描写には「生ふ」という詞が用いられることが多い。草に限らず一六六番の「磯の上に生ふるあしび」、九九五番の「草木生ひつつ」、一五〇七番の「百枝さし生ふる橘」、二八六一番の「磯の上に生ふる小松」など、樹木に対しても「生ふ」が用いられている。これらの「生ふ」は「生ひ茂る」の意で、二九番、一八一番、一〇四八番、二四七五番に見られるような、望ましくない状態においても用いられる詞である。このような好ましくない状態に対しては、「萌ゆ」は不適當といえる。

次にあげる一首は「生ひ出づ」の用例である。

水底に生ふる玉藻の生ひ出でずよしこのころはかくて通はむ

(卷十一・二七七八)⁹⁾

この歌は、水底に生える玉藻が水面に成長して出てくることがないように、表わになって人目についたりすることのないように通おう、という意で、この「生ひ出づ」は、成長して姿を現すという点において「萌え出づ」と同じであるが、「生ひ出づ」には「萌え出づ」のような晴れ晴れとした喜ばしさが含まれていない。

万葉集では「萌ゆ」は主に柳の美しさに対して用いられる詞である。単に蕨が芽生えたことをいうのであれば、「生ひ出づ」で構わないところを、あえて、「さわらびの萌え出づる」と表現したところに、「さわらび」の美しさをして、「春になりける」ことへの大きな喜びが託されているのである。一四一八番は「さわらび」「萌ゆ」「春」という組み合わせによって、柳の新緑のように鮮やかで美しい蕨の萌え出る春という、見事な早春の情景を詠んだことになった。

四、「權」について

一四一八番が宴席での歌ではないかということを示唆する上で、伊藤博氏の新説が参考となる。伊藤博氏は志貴皇子卷八・一四一八番の春歌の解釈において、長皇子卷一・八四番の秋歌をとりあげ、この二首が元々は対となって春秋を詠んだものではないかという、これまでにない説を打ち立てている。

長皇子と志貴皇子と、佐紀の宮に俱に宴せし歌

秋さらば今も見ること妻恋ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上

(卷一・八四)

伊藤博氏はこの八四番を次のように解釈している。

「秋さらば」(秋になったら)という以上、一首を詠んでいる季節は鹿の鳴く秋ではない。春か夏である。(略)
 一首は佐紀の宮の春色を楽しんだ折の詠で、「またおいでになって、秋の佐紀の宮のめでたいさまをもお楽しみください」と誘った歌にちがいない。⁽³⁶⁾

さらに、春歌と秋歌が本来は対となつて詠まれることが多いこと、「招いた人の歌があつて、招かれた人の歌がない」のは不自然であることを指摘し、志貴皇子による春歌の存在を想定している。「元暦校本、紀州本、伝冷泉為頼筆本、広瀬本など、一つならぬ古写本の目録に(略)『長皇子御歌』と記すその次に『志貴皇子御歌』の一行を伝えている」ことを根拠とし、佐紀の宮の主である長皇子に「秋にもまた」と言われて、主人側の『春色』をほめて感謝の意を表す⁽³⁶⁾歌を、題詞に現れる志貴皇子が詠んだのではないかと推測している。その八四番左注の「志貴皇子御歌」に該当するものとして、志貴皇子の春の歌として名高い一四一八番をとりあげている。そして、一四一八番が巻一の巻末と巻八の巻頭の両方にとられた後、「後人が、どちらかといえは位置の軽い巻末の方を削ってしまったのではなからうか⁽³⁷⁾」という説を発表している。この説を支持するならば、一四一八番も春の宴席で詠まれた歌ということになり、「志貴皇子懼御作歌」の「懼」も春到来の喜びと、宴席での楽しみという両方の意味がこめられることになる。

八四番の「妻恋ひに鹿鳴かむ」、これは「さ雄鹿の 妻呼ぶ秋は」(巻六・一〇五三)の例からも分かるように、秋になると雄鹿が妻を求めて鳴くという場面を詠んでいる。

秋に鹿が鳴くという場面を読むことで、秋らしさを表現しているのに対して、一四一八番は「さわらびの萌え出づ

る春」という場面によって春らしさを表現している。「わらび」は「十二種若菜」に数えられることもあるので、この「さわらび」から、春の行事である「春菜摘み」を連想することができる。

春菜摘みを詠んだ歌として次の六首があげられる。

…この岡に 菜摘ます児…

(卷一・一)

春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見らく良しも

(卷八・一四二二)

明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ

(卷八・一四二七)

難波辺の人の行ければ後れ居て春菜摘む児を見るが悲しさ

(卷八・一四四二)

国栖らが春菜摘むらむ司馬の野のしばしば君を思ふこのころ

(卷十・一九一九)

…娘子らが 春菜摘ますと…

(卷十七・三九六九)

一番、一四四二番の「児」、一四二二番の「妹」、三九六九番「娘子」という詞からも分かるように、春菜摘みは主に女性の仕事で、男性から見て愛しい相手が春菜を摘んでいる姿が詠まれている。さらに、一番では春菜摘みが求婚の場ともなっている。

一四二二番や一四二七番同様に、一四一八番の萌え出た「さわらび」も春菜と考え、その生えている垂水の辺りを、春菜摘みの行われる求愛の場として考えることができるのではないだろうか。

このように考えると、八四番の秋の雄鹿が妻を求めて鳴くという「妻恋ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上」と、一八一四番の「垂水の上のさわらびの萌え出づる」は、秋の求愛の場、春の求愛の場としての対照性を見せているといえる。

春菜である蕨の芽生えは、春菜摘みの行事を連想させ、求婚、求愛の場となる春菜摘みは、八四番の雄鹿の求愛の情景とちようど対になると考えられる。

次に、題詞「權」について考察する。先行研究における「權」の解釈は先に四つ挙げたので、次は、集中における「權」の用例から分析を行う。

題詞に「權」が用いられているのは次の二首である。

大伴家持の、霍公鳥を權びし歌一首

いづくには鳴きもしにけむほととぎす我家の里に今日のみそ鳴く

(卷八・一四八八)

權逢

住吉の里行きしかば春花のいやめづらしき君に逢へるかも

(卷十・一八八六)

一四八八番では「ほととぎす我家の里に今日のみそ鳴く」ことが、一八八六番では「いやめづらしき君に逢へるかも」ということが、題詞「權」の内容や原因となっている。題詞もそれぞれ「權霍公鳥」「權逢」と記されており、歌の本文だけでなく、題詞の中に「權」の対象が明示されている。

歌の原文に「權」が用いられている用例として、次の二首が挙げられる。

藤皇后の、天皇に奉りし御歌一首

我が背子と二人見ませばいくばくかこの降る雪も嬉しからまし (權有麻思)

(卷八・一六五八)

待つらむに至らば妹が嬉しみと（權跡）笑まむ姿を行きてはや見む

（卷十一・二五二六）

一六五八番の第五句「嬉しからまし」の原文「權有麻思」、二五二六番の第三句「嬉しみと」の原文「權跡」にそれぞれ、「權」の文字が用いられている。二首ともに「權」の字によって「嬉し」という詞を表しており、一六五八番では、光明子から「我が背子」である聖武天皇への思慕が、二五二六番では、愛する夫と再会する妻の喜びがこめられている。

その他に、集中における漢文の「權」の用例として、次の二例をとりあげる。

跪承芳音、嘉權交深

（卷五・八二二）

一代權樂、未尺席前

（卷五・沈痾自哀文）

八二二番の「嘉權」は、大伴旅人から琴を贈られた藤原房前がありがたく光榮に思う気持ちを表しており、八九六番の「權樂」は宴席での酒などの楽しみを指している。

これらの用例から「權」は、恋しい相手への相聞歌的な感情や、相手への感謝、宴席における快樂など、どちらかというとな私的な感情を表す詞といえる。よって一四一八番の「權」が示す内容も、加封や進位、政治的立場の転換という公的な喜びというよりは、私的な喜びを表すと考えられる。

また、一六五八番「權有麻思」二五二六番「權跡」にみられる相聞歌的要素や、八二二番「嘉權」の謝辞、八九六番「權樂」の宴の場を表す用例から類推すると、一四一八番の題詞「權」も同様に相聞や宴席の場を表す意味で用い

られたといえる。よつて一四一八番も、春菜摘みやそれに伴う宴会の場において詠まれたものと考えられるのである。

おわりに

一四一八番は春の到来を寿ぐ歌であるが、それは見たままの景色を詠むということに限定されるものではない。本来は山の日当たりの良い斜面に生えて、滝のほとりのような湿地帯に生えるものではなく、また陽春から晩春にかけての植物である藤を早春の証とし、その美しさを柳の新緑にたとえて「萌ゆ」と表現することなどを考えると、この歌は写実的に実景を詠んだものとは言い切れない。むしろ、題詞の「懽」という詞の持つ相聞、宴席などの意味に加えて、「垂水」の持つ神性や、色鮮やかな「さわらび」の組み合わせによつて、春という主題を観念的に詠んだ歌として捉えるべきである。

注

- (1) 『新日本古典文学大系2 万葉集二 岩波書店、二〇〇〇年 二二五頁
- (2) 鴻巣盛廣氏『万葉集全釈 第二冊』大倉廣文堂、一九三二年 五二三頁
- (3) 稲岡耕二氏『和歌文学大系二 万葉集(二)』明治書院、二〇〇二年 二八一頁
- (4) 伊藤博氏『万葉集釈注 四』集英社、一九九六年 四二四頁
- (5) 村山出氏「志貴皇子の歌——「懽御歌」の解釈の始点の検討——」『国語と国文学』一九八二年十二月
- (6) 小川達雄氏「統・志貴皇子の歌の解釈——その発想の特質について——」『目白学園女子短期大学研究紀要』第二十号 一九八三年十二月
- (7) 土屋文明氏『万葉集私注 四』筑摩書房、一九五二年 二九一頁

- (8) 大浜殿比古氏「志貴皇子」『万葉集講座 第五卷 作家と作品Ⅰ』一九七三年、文弘社 三四七頁
- (9) 山崎良幸氏「志貴皇子御作歌——製作年次とその意味について——」『高知女子大國文』十八号、一九八二年七月
- (10) 『新潮日本古典集成 万葉集二』新潮社、一九七八年
- (11) 『新編日本古典文学全集 7 万葉集②』小学館、一九九五年 二九三頁
- (12) 井手至氏『万葉集全注 卷第八』有斐閣、一九九三年 二五頁
- (13) 中西進氏『万葉集』講談社、一九八四年 五八三頁
- (14) 堀勝博氏「志貴皇子『石激垂見』について」『城南國文』七号、一九八七年二月
- (15) 森斌氏「志貴皇子歌試論——懼びの御歌（八・一八一四）について——」『自然と日本文学』一九九二年七月
- (16) 窪田空穂氏『万葉集評釈 第六卷』東京堂、一九五〇年 三〇一頁
- (17) 武田祐吉氏『万葉集全註釈 七』角川書店、一九五六年 二六頁
- (18) (7) 土屋文明氏に同じ
- (19) 金子元臣氏『万葉集評釈 第四冊』明治書院、一九四五年 二二〇九頁
- (20) (16) 窪田空穂氏に同じ
- (21) (17) 武田祐吉氏に同じ
- (22) 『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』岩波書店、一九八九年
- (23) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、一九六七年
- (24) 『新編日本古典文学全集 24 源氏物語四』一九九七年、小学館
- (25) 『新編日本古典文学全集 18 枕草子』一九九七年、小学館
- (26) 『平安時代儀式年中行事事典』東京堂出版、二〇〇三年
- (27) 井手至氏『万葉集全注 卷第八』有斐閣、一九九三年 二五頁
- (28) 若浜汐子氏『万葉植物概説』潤光社、一九五九年 三五〇頁
- (29) 山田卓三氏・中嶋信太郎氏『万葉植物事典』万葉植物を説む』北隆館、一九九五年
- (30) (15) 森斌氏に同じ

- (31) 『日本国語大辞典 第二版 第十三卷』小学館、二〇〇二年 一三四—頁
- (32) 窪田通治氏・藤森朋夫氏『万葉集総釈第四』楽浪書院、一九三五年 四頁
- (33) (27) 井出至氏に同じ
- (34) 『日本古典文学全集 4 万葉集三』一九七三年、小学館 二六五頁
- (35) 伊藤博氏『万葉集釈注二』集英社、一九九五年 二二九頁
- (36) (35) 伊藤博氏に同じ
- (37) (1) 伊藤博氏に同じ